

# 里見八犬伝論

——信乃の物語——

田川 邦子

(一)

『南總里見八犬伝』肇輯五冊が世に出たのは文化十一年（一八一四年）、第九輯下帙下編之下十冊を以って完結したのが、天保十三年（一八四二年）である。作者馬琴は、四八才から七六才までの二八年間を、この作品に費したことになる。もちろんこの間『朝夷巡鳥記』三十卷三十一冊、『近世説美少年録』（未完）五十卷四五冊、『俠客伝』（未完）十五冊などを、並行して書いているから、『八犬伝』のみにかかりきっていたわけではない。

肇輯（初輯）を出してからおよそ二十年間、『八犬伝』全体の長さからいえば、折り返し点にあたる九一回、最後の犬士大江親兵衛を除く残り七犬士の列伝的部分が完了し、船虫が殺される、そこまでは馬琴の筆の運びは、ややスローテンポであるといえる。量にして残り二分の一の、親兵衛活躍の物語から、最後の扇谷・山内連合軍と里見家の合戦に至るまでの後半は、毎年五冊から多い年で一〇冊、休みなく書き継がれている。最後には眼病で視力を失い、嫁の路女に口述筆記させる方法さえとられ、完結にこぎつけるのである。

今日『八犬伝』を通過して思うことは、伏姫・八房の富山の洞の物語はあまりにも有名ではあるが、これはあくまで伝奇小説の発端でしかないということである。作品の中心は、犬士銘々伝、または犬士列

伝ともいえる、大部を占める中間部分であり、小説の本来の面白さも、ここに集中しているのである。

馬琴が完結を急いで、ひたすら筆を走らせた後半では、大江親兵衛の物語はともかくも、大団円の合戦物語は、読み通すのにかなりの忍耐が要求されそうである。あらずもがなの部分だと評したのは内田魯庵であり（『八犬伝談余』）、「へたな修羅場説と同様ただ道具立を列べるのみ」で、おおよそ戦闘や合戦を記述描写する場合の、ダイナミックスに欠けるといえるのが、その見解であつた。

これを馬琴の言葉で解説すれば次のようになる。

作者云、約這水陸三ヶ所の闘戦の勝敗結果は、皆是十二月初の八日にて、同日の事なり。然ども今詳に、是を編次るに及びて、三所を駁雑して、綴るべくもあらず。こゝをもて、初に行徳口なる二犬の戦功を具にして、畢て、次に国府台、又其次に、州崎の水戦を具にす。一戦終て又一戦始るにあらず、俱に是同日の事なるを、看官宜く照見るべし。蓋しこの水陸大兵大戦の一挙は、予が腹稿二十余年の今に至りて、一事も遺れ漏すことなし。（第百六十四回）の附言

まず事柄や事件を描くについての網羅主義がある。この網羅主義は同時に細密主義でもあり、事と事、物と物、また人間相互の細密なかわりに拘泥し、空白の部分が残るのを恐れるかのように、徹底している。三つの戦闘それぞれを別立てにするのも、八犬士それ

それに活躍の場を創るためであり、過剰な描写に言葉が氾濫し、逆に戦況の全体が少しも見えてこないという、不思議なことになってくる。「一戦終て又一戦始るにあらず」「皆是十二月八日にて、同日の事なり」などと、作者が回外で野暮な断わりを言うのは、おかしい事であるが、やはり読者にとってこの断りはあった方がよいかもしれない。この戦争場面の表現は馬琴も気になるところがあったようで、先のような断わりの他にも

本伝第九輯に至りては、三十三回、皆軍旅攻伐の事ならざるはなし。羅貫中の大筆なるすら、修羅闘諍は、余韵始の如くならず。況や己が如き軽才もて、本伝力戦の談までも、看官の飽なくなさんば、最難しとも難かる技なり。(八大伝第九輯卷之三十三簡端附言)

など、ため息まじりの弁解、表現の難しさをもらしている。

「裨官野史の言、風を捕り影を逐ふ、架空無根、何ぞ世の人に裨益あらん」(同九輯卷之三十三簡端附録作者総自評)のように、第九輯になって急に増えてくる、作品の端々に書き残す作者馬琴のこの種の言葉は、二十八年の大作も終末部に入り、失明のことも手助つて、急に襲いかかる疲労感と空しさを表明している。

まさに書いているのは「架空無根」の戦争物語、己れの筆法に焦ら立ちを感じながら、平和な時代に見たこと聞いたこともない合戦譚を延々と書きつづけることの空しさ難しさ。当時の読者はどうあったか分らないが、今日の我々読者には、我慢して読まれる戦争物語よりも、作者が随所で濡らす、この種の溜め息まじりの作者の本音の方がよほど興味深く面白く、一世紀以上も昔の作者が、今日の前に姿を現わしたような近親感さえ覚えるのである。

次いで「この水陸大兵戦の一挙は、予が腹稿二十余年」というのにも、注意しておく必要がある。末尾およそ二十八回(全体が一八〇回であるから、六分の一強に相当する)の紙幅を費して書かれる、この

里見対扇谷・山内の架空の合戦談は、中途からの思い着きなどではない。これには彼の『水滸伝』観が、深くかかわっていると思われる。『水滸伝』と『南総里見八犬伝』の関係は、馬琴自身も処々に書き、今までにいろいろ論じられてきたが、単に影響を受けたという以上に深い関係があると、私には思われる。それは江戸の作家たちにとって、『水滸伝』とは何であつたのかというところに至り着く、かなり面倒な問いかけになってしまふので、ここでは深入りする余裕はないが、馬琴の金聖嘆七十回本の批判の言葉にこめられる意を汲み取るところで、その一端は理解できるのである。

金聖嘆が『水滸伝』を七十回で終結すべきものと考えたのは、梁山泊に集まる豪傑たちが、招案を受けて後、放臘征伐に従う七十回以後に痛烈な批判を持っていたからである(『第五才子書水滸伝』——聖嘆外書)。聖嘆の『水滸伝』論そのものは、ユニークではあるが分裂症的なところがあり、文学的には評価はするが、感情的には許し難いものを感じている気配が濃厚である。それというのも結局盜賊の領袖宋江への嫌悪感が先行するからで、従つて「若便忠義而在水滸、忠義為天下之凶物惡物乎哉、且水滸有忠義、国家無忠義耶」と、朝廷の招安を受けて国家のために忠義を尽すくだりは、あり得ないことというよりも、あつてはならないこととして削除するわけだ。

馬琴の『水滸伝』観は、「作者の大意、草賊を賢とし、衣冠を賊とす、その筆力、人情を尽すが如きは、毫に小説の巨擘なり、後世これに加るものなし」(『玄同放言』)でも分るように、文学的価値への評価はまことに高いものがある。従つて

洪信が石碣を披きて、魔君を奔せしにより、一百八人の豪傑出現し、後に石碣天降て、魔君を取めたるにより、宋江等一百八賊、その本然の善に帰て、国の為に賊を討、奸を鋤に至れば、ここまでが趣向の半体なり、必しも石碣の天降しをもて、結局とすべからず(『同前』)

と、七十回をもつて結末とした金聖嘆には、強い批判を寄せていた。

『里見八犬伝』執筆中に、再び金聖嘆七十回本の持つ問題点が、彼の意識を去来するようになるのは、やはり『八犬伝』も同じような問題を抱えざるを得ないところがあつたからである。『水滸伝』で石碣天降る、つまり百八豪傑が梁山泊に嘯集する七十回は、『八犬伝』でいえば百三十一回、八犬士全員が漸く勢揃いし、安房の里見家の家臣になるくだりに相当する。つまり両作品の構造は非常に似ているのである。実際『八犬伝』の面白さは、百三十一回までにあるといつてよいから、ここを以つて大団円にすべしという読者の評判は、馬琴の耳に相当入つて来たらしい。

しかし先にもいったように、二十年以上前の、執筆当初の腹案の段階から、最後の合戦譚は計画の中に入つていた。ただ筆を下した文化十一年の当時はもちろん、かなり書き進めた段階でも、まさか完結までに二十八年の歳月を要するとは思わなかつたであらう。『八犬伝』の巻立ては、特に最後の九輯に入つて相当複雑になつて来る。それは全百八〇回のうちの九九回を、九輯に押し込めようとしたからで、彼が「九」の数字（陽数の最高）にこだわつた結果である。最初の予定より長くなつてきたので、それを整理するために、最後の九輯は、複雑な巻立てをとらざるを得なくなつたのであるが、これは思うままに書き足して行つた結果生じたことではなく、むしろ当初の構想に、あくまで忠実であらうとしたことから起つてきた無理なのである。

ではなぜこのように予想に反して長大になつたかといへば、これは馬琴の小説作法に原因を求める他はない。『八犬伝』の表現論が必要とされる所以であるが、今はこれを他の機会に譲りたいと思う。

馬琴は『里見八犬伝』を書くにあつては、構想の上では少しの迷いもなかつたように思われる。明確な見通しと、確固たる自信があつたから、『近世説美少年録』や『俠客伝』のように未完で筆を投げることなく、眼疾と闘いながらも、完結へと導くことが可能であつた。

そしてその見通しと自信を支えているのが、他ならない『水滸伝』だったのである。百三十一回より後は駄足だとする批判に答えて、馬琴はいふ。

八犬士、俱に安房に到りて、里見の家臣になるのみにて、大江親兵衛を除くの外、七犬士、皆一介の功いさなくは、是尸位素餐しゐそくの人になるべし。犬士等かくの如くにして、可ならんか。且京師みやうしの話説わたり微りせば、俗に云田舎芝居に似て、始より説く所、東八州の事に過ぎず。（中略）譬ば水滸伝の如きも、七十回の後、招安の事、及京師の話あり。こゝに至て一百八箇の魔君、皆よく変じて、宋の忠義士になれり。尙是等の事なくて、七十回にて局を結ばず、彼一百八人は、梁山泊嘯聚の強人やうじんのみ、何をもてよく勸懲にせんや。『八犬伝』第九輯卷之二十九簡端或説贅弁

彼の脳裡にあつたのは『水滸伝』曼陀羅であつた。『八犬伝』は水滸伝曼陀羅の絵解き小説なのである。親兵衛京師に上洛する話から、扇谷内連合軍との水陸大合戦譚が、総篇の締め括りとして、なくてはならないとの確信もここから来ている。

## (二)

八犬士犬塚信乃、犬川莊助、犬山道節、犬飼現八、犬田小文吾、犬坂毛野、犬村大角、犬江親兵衛のうち、最初に登場する犬塚信乃が、後に出る犬坂毛野と共に、女装であることはよく知られている。これもまた当初から馬琴の構想の内にあつたことは、八犬士がまだ一人も登場していない、肇輯五巻の発端の部に、おそらく次回の予告の意をこめて入れた挿絵、「八犬子警蔵白地藏之図」で、信乃と毛野が女児として描かれていることから、推察できることである。

この挿絵の女児像によつて、読者が受けた印象は、「八犬士といへば、皆男であるはずだが、女武者もいたのか」というようなものであ

ったらしい。だから第二輯卷之三（第十五回）で、実際に信乃の物語が始まり、これが女装の男児だと知れると、馬琴の作意に不審を立てる読者が出たのも無理はない。

その不審は『犬夷評判記』によれば二点で、なぜ女装の信乃を八犬士の第一番に出したのかという事、そして（もし仮りに）毛野を眞の女子にするならば、信乃を女子にしても差し支えないではないか、という点である。後者の疑問には、あきらかに女武者への期待がある。『水滸伝』一百八人の中にも、女豪傑がいたのであるから、これは少しもおかしくない。

馬琴はこれに答えて

初篇の端像（先にふれた「八犬士髻歳白地之図」をさす）に、八士のをさなだちを図せし時、聊か思ふよしありて、信乃と毛野をば、女子に畫せおきたるなり、その故は、信乃を八犬士列伝の第一番に出さん為なり

と、第一番に出る犬士は女装でなくてはならないとする考えが、彼のうちにあったことを言明している。毛野はどうかといえば、これはあきらかに、信乃に引かれて出て来たもので、彼がしばしば用いる、対の趣向の一つである。女装の犬士が一人あつて特殊な光を放つのではなく、複数にすることで、同質のものの距離と差から、物語の空間を一層拡大してみせるのである。おそらく馬琴が本能的に狙ったこの効果は成功し、後に信乃の芳流閣の組みうちに対する、毛野の対牛樓の敵討という、視覚的效果満点の二場面を創出した。

念を押すまでもないが、信乃も毛野も女装はしていても、男児である。

これを女子のやうに見せしは、無益の趣向といはる、は、いまだ八士の興る所以を、よく思はざる故なるべし、彼玉梓は毒婦なり、しかるも牡犬に生れかはれり、伏姫は賢女なり、その行状丈夫に勝れり、この因縁を趣向とせり、されば信乃は男子なれども、仮に女子

に扮せしは、これ伏姫は女子にして、男子の気質あるを反覆せり、この故に信乃をもて列伝の第一とす（『犬夷評判記』）

これは伝奇小説の筋立てに関する言及ではない。

十四回（第二輯卷之二）、伏姫物語を書き終えたとき、その末尾に馬琴は、次の物語（信乃の物語）が始まるまでに、数十年の歲月があることを記し、読者の注意を促している。さらに、「譬ば彼水滸伝に、竜虎山にて洪信等が石碣をひらくの段より、林冲等が出現まで、その間数十年」、物語のない事を強調し、長篇伝記小説が持たざるを得ない、楔し（発端）と本伝の間の時間的空白を、公認のものとして認知させたい風である。

この空白はただに時間の問題ではなく、神の世界から人間界へ、聖なる空間から俗なる空間への次元の転換をも意味している。如何にしてこれを飛び越えるか。これは馬琴にとり、一つの問題であつたに違いない。筋書き的記述では乗り越えられない、伝奇物語が内包する豊潤な物語空間である。

『水滸伝』はこの点に関しては、いとも無造作に処理しているように見える。楔子に出る洪大尉というのは、我尽勝手な、それでいて保身の術には長ける官吏（武官）である。それが天子（仁宗）の使者として龍虎山に赴き、人々の制するのも聞かず、石碣を開き妖魔を走らせる。この大失敗について、彼はあくまで口を噤んでいた。それから数十年後、街のならず者から出世して、徽宗皇帝の寵臣となつた高俅を出すことで、ストーリーを繋いで行くのである。高太尉と高俅は何の関係もないが、宋朝官僚の高慢、横暴、いやらしさでは共通している。つまり『水滸伝』の基本モチーフの一つは、権力者批判なのである。

怪異談の部分はさりげなく脇へ退け、楔子から本伝への時間空白は、おおまかな年代記を配しつつ、官僚の生態を反復的に描きながら、乗り越えて行く。「水滸伝不説鬼神怪異之事、是他氣力過人処」（『聖嘆外書』）とする金聖嘆の論評は、まずは妥当であらうと思われる。

しかし馬事が聖嘆と見方を異にするのもこのところで、洪大尉が石碣妖魔を走らせ、九天伝女が天書を賜わるのが怪異談でなくて何でなろうかというのが、彼の一貫する『水滸伝』観であった。

石碣妖魔を走らせる発端を、怪異譚として捉える眼から見れば、一百八箇の豪傑の列伝には殆ど怪異性がない。つまり妖魔から現実の人間への、転生秘密の理法の物語に欠けているのである。馬琴が『水滸』に物足りなさを感じたとすれば、まずこの点に關してである。魔界から人間界へ繋がる因果關係の証、深く潜行する超自然的理法として『八犬伝』では、八字の靈玉と聖痕の痣が、考案されたわけである。

最初の犬士犬塚信乃が、名前も「信乃」と女性的で、女兒に扮して登場して来るのは印象的である。列伝第一の犬士が女装でなければならぬとする馬琴の考えは、伏姫の男まさりの氣質の反覆として説明されるが、男性でもなく女性でもない。両義的な曖昧性を含むものを、まず最初に印象づけることで、八犬士の人間像に個別性を附与すると共に、物語の世界に、重層的イメージをうえつけた効果は大きい。

信乃に女服を着せ、女兒として育てることを希望したのは、母親の手束であった。それは俗信によるもので、今迄に生まれた三人の男児が、みな襁褓の中に死んだので、恙無く育つことを願つてのことだといふ。このような男児の女性化に、母親の意志がかかわっているのは見逃せない。毛野の女装も動機は異なるが、母調布の希望によるところが大きかった。

母の手束が病死した折も信乃は衣裳を更えず、女の子の打扮で棺おくりに加わるので、村人の嘲笑的になる。信乃はついに怒気を含んで父を難詰するが、すべて母の意志から出たものであることを知らされたとき、その慈愛の深さに、改めて思慕の情を募らせるといふ具合である。

母の遺志を継ぎ、その死後三年間女兒の姿を守り通すというのは、

信乃に捺された痕跡の女性的なるものの意味が並のものでないことを表わしている。實際女装を解くのは父番作の死後、伯母婿墓六の屋敷に移ってから後であるが、これはすでに生前の番作の言葉により予告されていた。もちろん社会的には元服という通過儀礼に依るわけだが、背後には父の死と、父から授かる、聖にして男性的なるものの象徴「村雨の刀」がある。「これを汝にとらせんに、そのざまにては相応からず。髻を短くし、今よりして犬塚信乃戌孝と名告れかし」という番作の言葉は、「村雨の刀」が、女装の信乃が象徴する両性具有性に相応しくないと示している。結局女装の犬士信乃が、「村雨の名刀」を帯びるのではないということだけは銘記しておく必要がある。両者は相容れないのである。信乃に捺される女性的刻印があまりにも深いために、それをもどいて男性的自立をはかるためにも、神聖なる「村雨の名刀」は彼に附与される必要があったのだ。

しかしその過程は単純なものではない。信乃はこの名刀の所有者故に、却って幾多の困難に出遇わさなければならぬからだ。伯母婿墓六に神宮河で殺されかけたり、摩り替えられたとも氣附かず、許我(古河)公方成氏に、刀を携えて名乗り出るといふように、彼の苦難の原因にはこの「村雨の名刀」がからまることが少なくない。両性具有的とはいっても、むしろ女性的面のみが際立っていた信乃には、男性的自立そのものが一つの試練であったのだ。

ついでに言えば、伏姫から母親手束を経て信乃へ伝わる、両性具有的兆候は、「村雨の名刀」でもどかれ、全面水解するわけではない。楔子から本伝へ底流するこの微妙な色どりは、『八犬伝』全体にとつて可成り重要なもので、後には女装犬士犬坂毛野や、少年犬士犬江親兵衛などの登場で、繰り返して呼び起されるイメージの源流にさえなっている。

『八犬伝』は、聖女(母)伏姫と、その八人の息子たちの物語である。犬士たちは武蔵野やその周辺關八州の各地に、それぞれの父母から生

まれ出るが、皆幼児に父母を失い孤児となる。それというのも眞の親は、聖女伏姫一人のみであるからだ。小文吾の父古那屋文五兵衛だけは、比較の後まで生きているが、それでも小文吾はその死に目には会えなかった。父母に縁の薄いのが、彼らたちの宿命なのである。

信乃とても例外ではないが、それでも信乃については、父番作と母手束の邂逅から結婚までのいきさつ、信乃の誕生、家庭と両親、様々な幼児体験、父母の死、伯母の亀篠、暮六夫妻、許婚者浜路の悲劇というように、犬士として旅立つまでの詳細な物語が、その故郷大塚を中心舞台に綴られる。

〈孝〉の霊玉所持者に父母の存在が不鮮明では、話の作りようもないわけだが、これを犬士列伝の巻頭に据え、しかも武蔵国大塚の地に舞台を定めたことは成功であった。ここを舞台とする信乃の幼年の物語がなければ、『八犬伝』はずいぶんつまらない小説になっていたと思われる。

大塚は川越街道に近く、板橋に通じる江戸近郊の交通の要所で、古くから百姓町屋はあったようだが、延享二年には町方支配となったところである（文政十二年『御府内備考』）。伝通院、護国寺領などを含み、江戸市民には江戸の隣接地として、つとに知れているところであった。母が願を掛けて信乃の誕生を祈ったとする、滝の川の弁才天もここからそれほど遠くはない。

だいたい『八犬伝』の時間的原点は、嘉吉元年（一四四一年）の結城合戦に据えられといて、里見本伝と共に、犬士列伝の幾筋かは、ここを原点に派流していく構造を内包している。安房の里見家の始祖義実が、討死を覚悟した父季基の命令で、里見家再興のために二人の家臣をつけられ、敵（管領上杉憲実・清方）の包囲を突破して落ちのびるのも、結城合戦であった（第一回）。義実が安房に渡り、里見家興隆の端緒を開くのであるが、結城合戦そのものは悲惨である。結城氏が亡びるばかりか、結城氏朝に頼っていた足利持氏（鎌倉公方）の子

春王丸と安王丸が、捕えられて美濃の垂井まで送られ、そこで斬殺されるという、歴史にも知られた哀話がある。

〈大塚〉の姓は世を忍ぶ仮りの名字、「武蔵国豊島郡荻<sup>すが</sup>大塚の郷」の生えぬきの国人で、本姓も大塚というのが、信乃の生まれた家ということになる。祖父匠作、父番作は鎌倉公方（馬琴は「管領」と書く）持氏の近習であるとするから、見方によっては里見義実よりも正統派かもしれない。当然結城合戦では、結城城に籠城する。

里見季基が義実にしたように、落城の折匠作も番作に、虎口を脱出して大塚へ帰り名跡を継げと指図して、主君足利持氏から春王丸へ伝えて、今は匠作が預かる（村雨）の名刀を番作に委ねる（この刀は後に物語の展開の上で重要な道具となる）。自分は必死の覚悟で、護送される二公達の跡を慕い、奪取の機会を窺うのであるが、もちろんそれは成らず、樽井（垂井）で二公達と共に斬り殺されるのである。

番作は一旦は父の指示に従う素振りを見せるが、これまた春王安王二公達の跡を追い、その最後の場に乱入、大乱闘の末父の敵を討ち、二公達と父の首級を奪って逃走する。逃走の途中木曾山中の田舎道場で、これまた結城合戦で戦死した持氏の臣、井丹三直秀<sup>いのだんしう</sup>の娘手束と邂逅、二人は親が許した許婚者であったので結ばれるのである。

記述が少しくどくなつたかもしれない。しかし信乃の物語の発端は、正史から稗史を紡ぎ出す馬琴の方法を観察するには、適切な場である。歴史上の決定的なある一点に幾つかの糸口を見つけ出し、もとを共通体験の世界として太い紐で括っておいて、それぞれの糸口から別々の物語を編み出していく。それぞれの物語の位相の違いは、その物語全体の世界の広がり为保证し、内部浸透の深さ、人間の行動様式の多様性を印象づける。

未知の国安房へ渡って、言葉は悪いが篡奪者として成功して行く里見義実。旧里大塚へ帰っても、自分の居場所すらなかった大塚番作。番作はしかも樽井の大乱闘で深傷を負い、不具者になっていた。新妻

の手束に助けられ、漸くの思いで旧里大塚に帰り着いたとき、大塚家の名跡は、腹違いの姉夫妻に奪われていたのである。

武蔵野国大塚の郷を舞台に描かれる犬士列伝第一の物語は、結局のところ名跡財産を奪われて零落する家族と、横奪して羽振りをきかす成り上りの家族、つまり同族間の対立と憎悪の物語である。中世的在地社会に相応しい人間劇、などという見方では済まない。家、名跡、財産をめぐるこの種の同族間対立の話は、古くて新しいテーマで、何も在地社会特有のものでもない。暗くて陰湿でやりきれないが、戦争や敵討よりも平和な時代の封建市民読者には、よほど身近なテーマであるといえる。

だいたい犬士列伝は皆暗い。『八大伝』を読了した時の印象を、<sup>①</sup>「暗い」という人は少くないが（例えば川村二郎『里見八大伝』）、この暗さは犬士列伝の暗さにあるといえる。馬琴は考え得る限りの、人間の暗い運命のサンプルを寄せ集めてきて、犬士たちそれぞれに配分したのではないかとさえ思われるくらいである。神女伏姫を母に載く運命の児たちであるから、現実の父母は假りの親で、いずれ本来の母伏姫のもとに帰らなければならぬ。孤児になるのは止むを得ないにしても、そのいきさつがあまりにも暗い。母神伏姫の加護でもなければ、自殺して果てる他ないほどである。

今は一つ一つを書かないが、犬山道節、犬村大角、犬飼現八、犬川莊助がことに悲惨な幼児体験を持つが、これら残酷な物語の中に、聖なるものに与えられる運命の刻印が、同時にはりついているのも見逃せない。信乃の女装もそうであるが、神隠し（仁親兵衛、蘇生譚（道節）、異常出生譚（毛野）、申し子（信乃）等々、ここでもまた英雄や聖なる人格に刻印される神話的指標が、まるでサンプルの如く取り揃えられているのである。

(三)

番作の義姉亀篠の夫墓六については、

人となり、武士になるべきものにもあらねば、僅に村長を命ぜられ、帯刀を許されて、八町四反の莊園を宛行れ、彼地の陣代大石兵衛尉が下知を承て、勤むべき旨を仰らる（第十六回）

とあって、彼のような人物が当主となったために、大塚家の社会的地位は格下げになった。自墮落で見栄っ張りの女亀篠が引張り込んだ破落戸（いたずらもの）である。村長の権威を振り廻して百姓共をいためつけ、欲だけは深いから、暮らし振りは豊かである。

近くに住みながら、番作は墓六を無視しつつける。すると番作の冷やかな態度が、墓六夫妻の嫉み心をかき立てる。

すべて墓六・亀篠は、親族他人の差別なく、能を妬むの病あり。愛惜ふかく心僻みて、とにかく人を讒れども、素より己に見識なければ、人真似をする事もおほかり。

と馬琴は書く。

いったい馬琴は、墓六・亀篠の人間像を何をモデルにして作り上げたのか。「帯刀を許され」た、「陣代の下知を承」る「村長」なるものが、室町中期の武蔵野の在地社会のイメージからは、どうしても浮かび上らない。だからといって浄瑠璃ほどのアナクロニズムでもない。大塚村について、おそらく村落の面影が色濃かった、七八十年前頃の大塚近辺を頭に置いて描いていたものと思われる。

だが墓六・亀篠の人間像に関しては、身近かな人間観察が大いに役立っているのはなからうか。墓六・亀篠の番作一家に対する嫉みと対抗心は、呆れるほど小市民的で他愛がない。例えば番作が書物一巻を著すと、墓六は番作の才能に云いようのない嫉みを抱くなどというのは、江戸市民の見栄や名誉心の範疇に属する。

番作一家が飼う与四郎犬に対抗して、墓六もまた何回か犬を飼うが、みな与四郎犬に噛み伏せられるので、犬を諦め猫を飼って溺愛するなどというのも、ベットで競争する小市民社会の風俗そのままである。江戸近郊の地大塚に似つかわしく、そのまま江戸的、そして日常的ですらある。

こんな他愛のない事柄の集積が、みるみるうちに本質的問題に展開したり、決定的破局になだれ込み、またはどうにもならない宿業の陥穽に人間を誘い込むというのが、この辺を綴るときの馬琴の筆法である。犬猫戦争は墓六の嫉妬心から出たもので、番作は初めから相手にもしないが、事態は拗れに拗れて、結局「村雨の名刀」の所有をめぐる駆け引きへ展開していく。

墓六の嫉み深さは、彼が大塚家の家長としての資格に欠けることへの、無意識的な自覚と劣等感に根ざしているから、家の名跡の象徴たる「村雨の名刀」の所屬と効用をめぐる駆け引きは、いずれ墓六が番作に対して仕掛けなければならぬ、争いなのであった。

番作が争いの深刻化を避けるかのように、自害の道を選ぶのは、生存の資格を失った人間の絶望死ととてよいだろう。古那屋の場における房八の死（三六回）や、雛衣の犠牲死（第六五回）が、複雑に仕組まれた虚構の中に現前する、きわめてフィクショナルな、ある意味では祭式性に富む死であるのに対し、この番作の死、また発端の金碗八郎孝吉の自害もそうであるが、死を潤色する物語の意味づけが欠落している。だからその分だけ、人生の実相が透けて見えるのである。

ここで浜路に触れなければならないだろう。馬琴は「八犬伝」のヒロインたちの殆どに、実に苛酷な運命を用意したが、なかでも信乃の許婚者浜路には、もっとも悲惨な運命と死を与えている。それは物語的運命と人生の苦悩が、浜路の上で二重交又するような形で集中的に現われるからである。

富山の洞の伏姫も、苛酷な運命に耐え抜いて果てるが、それは玉梓

の怨霊の支配を受けていたのであって、いわば前世からの約束事である。彼女は悪霊に支配されている自分の運命を知らないが、眼前の八房は一匹の犬でしかないから、矛盾の間にあつてもとるべき態度に迷いはなく、意志とモラルに身を委ねて果敢に生きて、果敢に果てる。実人生の苦悩は片鱗も読み取れない、というよりも読み取れないように故意に仕組まれているというべきであろう。

浜路は大塚村の墓六夫婦の家庭に、養女としてもらわれて来た児である、墓六夫婦は子供に恵まれなかった。「妬みの病」に犯されている彼ら夫婦が、番作夫妻の一粒種信乃の存在に、羨望の念を禁じ得なかったのも当然の成り行きである。墓六の番作への対抗と挑戦は、まず養女を貰うことから始まったといつてよい。「その偏執の心もて、わが物とだに名をつくれれば、傍いたく愛に溺れ」る墓六龜篠である。浜路はこれ見よがしに、分に過ぎた綺羅で飾り立てられて育てられるが、養父母の気分本位のエゴイスチックな愛が、彼女の精神状態を常に不安に陥れ、精神的には孤独な少女になっている。

江戸の読本は、とかく実人生から遊離して、荒唐無稽な架空談義に始終するように思われがちであるが、少くとも馬琴の浜路についての描き方はそのようなものではない。

墓六夫婦は浜路に貰い子であることをひた隠しに、ただ実の子のように言いよかせて押し通しているが、他人の口からいろいろ噂が彼女の耳に入り、実の親への思慕や空想が彼女の心を一層暗くする。馬琴は信乃と浜路の物語の後、例の芳流閣上の格闘を描くに次いで、犬飼現八の身の上話へ移り、ここで再度貰い子の物語を繰り返す（第三二回）。

八犬士の一人犬飼現八も、実父の生活苦から、赤子のうちに養父に引き取られて成長するのであるが、それはまったく浜路の場合と対照的なのである。現八の養父見兵衛は、現八が貰い子であることを少しも隠さず、薄命な実父母について語り聞かせ、現八の精神的成長を奨



ます材料にしている。このような態度が、実際に好結果をもたらすかどうかの一般論は別にしても、少くとも現八の心に養父見兵衛は微禄卑職な武士であつても、尊敬に価する人物として敬慕の念を残す結果となつたのである。

浜路と現八、この対照的に描き分けられる貴い子の物語を見ても、『八犬伝』には単なる荒唐無稽な観善懲惡小説と断定できない、人生表現の深さがあることを思わないわけにはいかない。

輕薄な才子網乾左母二郎に恋慕されたり、悪陣代箴上宮六に嫁ぐことを強要されるなど、さまざまの不運が浜路の身を襲うが、彼女が想いを寄せる信乃は、女の真情には引かれても、受容することを拒む。これについては「信乃の如きはいよいよ稀なり」で、情に溺れないことに男性的価値を見出そうとする馬琴の論評がある(第二十五回)。

しかし作中にあるこの種の作者のお喋りには、用心してかかった方がよい場合がある。何故なら馬琴は浜路の不幸をこれだけのものとせず、彼女が背負う過去の暗い宿業をひそかに仕組んでいるからだ。浜路は八犬士の一人犬山道節の異母妹であつた。兄妹の父は管領扇谷定正に亡ぼされた練馬倍盛の臣である。兄妹の父親には二人の側室があり、一人は道節の母、他の一人は浜路の母であつた。浜路の母黑白は、男児を生んで正室に直つたもう一人の側室阿是(あぜ)非(ひ)留(りゅう)守(しゅ)に母子共に毒殺する非常手段に出たのである。道節はその阿是非の子で、殺されて一旦は葬られたが、不思議に蘇生して助け出されたのである。黑白は夫の手で斬られ、その娘浜路(その当時は正(ひま)月(づき))が、生涯不通の約束で養女に出されたのは、当然の成り行きであつた。

一見大仰な因縁話に見えるが、江戸の文学や芸能では別に珍しいものではない。むしろ人間は何らかの因縁のもとに生まれ、生涯宿業に支配されて生きるものだとする見方が一般的であるから、文学的虚構に於ても、複雑な因縁話の構図が、限りなく増殖していく傾向がある。道節の母の敵は浜路の母である。このような宿縁を持つ異母兄妹が

一つの世界に共存できるわけではない。八犬士の結合は、実の兄弟よりも親密な精神的な繋がりに依つてゐる。浜路が信乃の妻になることは、義兄犬山道節との関りから見ても絶望的なことであつた。

信乃が許我に出発する前夜、浜路は信乃の部屋を訪れ、想いの全てを述べて信乃の心を揺さぶる。「浜路くどき」で有名な場で、哀切な響きがこもる名文章が、女の感情の世界を描き尽している。

浜路は伏姫と共に、馬琴がもつとも力をこめて描いた、『八犬伝』中の女の物語である。伏姫は聖女であるから、女性的な生の断念を余儀なくされても、聖女として蘇えることで生きつづけるが、現実の女浜路には、行く手の道は全て阻まれてゐる。浜路にあらゆる不幸を仕掛け、最期には男性的象徴(村雨の刀)で斬り殺すことで、女性的なもの全てを抹殺してしまつた馬琴である。少しやり過ぎたとの思いが残つたのかもしれない。浜路は再び亡霊となつて信乃の夢枕に立ち、別の浜路が信乃の前に現われる(第六十八回)など、物語中で強引に断ち切つた女の感情の行く手について、馬琴は馬琴なりに苦慮しているさまが、後の構想の展開の中に窺えることを、つけ加えておきたい。

犬士の中で信乃だけが、女に思いをかけられる特性を持つが、これはおそらく女兒として育てられた彼の幼児体験に根ざしていると思われる。「村雨の名刀」を持つて自立しても、過去の女性的特徴の名残りが、何程が残つていて、それが逆に女を惹きつける要素となつてゐるのかもしれない。元服して男となつても「信乃」という、女性的名前は、改めることはなかつた。「名註自性」(名称はものの本質を表わす)の哲理は、『八犬伝』を貫流する根本法則だったのである。